



MIRANDA

## 吉村貫一郎に見る合理と義

先日筆者は友人の勧めで生まれて初めて宝塚歌劇団の舞台を観劇した。舞台上のあらゆるものが華々しく、その耽美的な世界観にはただ圧倒されるばかりであったが、上演演目「壬生義士伝」<sup>1)</sup>はストーリーも大変面白いものであった。新撰組隊士「吉村貫一郎」の生涯を描いた物語の仔細をここで語る訳にはいかないが、特に興味深かったのは劇中での吉村貫一郎の描かれ方だ。極まった貧困の果てに盛岡藩を脱藩し新選組に入隊した吉村は、寒村に残す妻子への仕送りの金を稼ぐために汚れ仕事も厭わず、そんな彼を周囲は守銭奴とからかう。しかし、鳥羽伏見の戦いで錦の御旗を掲げた薩長軍を前に自軍が潰走していく中、「義のために戦ばせねばなり申さん」と叫んだ吉村は、自身の命も顧みずにただ一人押し寄せる敵軍に立ち向かうのである。

経済合理性の観点に立って「貧困から妻子を救う」という目的を貫徹しようとするならば、吉村は勝ち目のない戦になど挑まずに一目散に遁走すべきだった。しかし、吉村は自身の中に揺るがぬ「義」を持つ<sup>まこと</sup>眞の侍であり、義への恭順の想いが彼を火花のように激しく儚い蛮勇的行動へと駆り立てる。この「義の暴発」とでも言うべき経済合理性の破壊こそが、吉村の人間性を最も顕著に特徴付けるものであり、見る者に鮮烈な印象を残してくれる。

吉村貫一郎に限らず、人は時として経済合理性を

無視した行動に走るが、それは愚かさ故の暴挙なのだろうか？ 次の例題で、誰しもが経済合理性から逸脱しうることを示したい。「貴方とA氏に1億円を山分けする権利が当たった。配分を決めるのはA氏だが、貴方が同意しなければ二人にお金は支払われない。チャンスは一度きり。さて、A氏の提示は『貴方は1円（A氏は9999万9999円）』であった。貴方は同意するか？」…同意の場合は1円、拒否の場合は0円の収益なので、同意が合理的だが、大多数の人は断然拒否を選ぶに違いない。A氏のひどく利己的な行動を目の当たりにした時、自分は合理的な人間だと自負している人であっても、この暴挙を許すまじという衝動を覚えずにはいられないはずだ。人は自身が感じる幸福感が大きくなるよう行動するが、この幸福感の尺度の中に自然と投影されている信念、愛情、自尊心、果てはルサンチマンの念などの多様な感情的因子をすべて忘却して経済合理性のみに従うことは、想像するよりもずっと難しい。

経済や金融の世界において、人の非合理を理論体系化する行動経済学の分野は今も盛んに議論されている。これらの理論が更に高度化すれば、いつかは鳥羽伏見の戦いで吉村が取った行動を定量的に評価できるようになるのだろうか？ 興味深い反面、少し無粋な気もするが。

(須貝 悠也)

1) 浅田次郎原作、宝塚歌劇団雪組公演（2019）。